

編集部が迫る！



発達保障って
なんですか？

松本 昌介さん (上)



まつもと しょうすけ

1936年東京生まれ。長年、都立養護学校の教員として肢体不自由児教育に携わる。全障研経営委員、全国肢体障害者団体連絡協議会役員など歴任。著書に「実践記録集 肢体不自由教育覚え書き」など

産声をあげた『みんなのねがい』

私が教員になった1959年頃は、障害児教育について勉強する機会も参考図書もほとんどありませんでした。肢体不自由児の学校では、脳性マヒなど重度の障害をもつ子どもが増え、どう教育すればいいか悩む日々でした。でも、勉強していかなくやならないっていう気運がありましたね。

そんなとき、日教組の全国教研集会で、継続的な研究会をつくらうという声が出て、全障研の結成に向けて動き始めたわけです。私は結成大会の準備事務局などをやっていた。そして、すぐに雑誌をつくる話ができました。

私は、高校生の時から新聞づくりが好きで、大学生になってからは「わだつみ会」（日本戦没学生記念会）の機関紙編集にも関わっていました。字を書くことが苦手で、クラスやサークルで文集をつくるなど、ページ割りなどの雑用係になるわけです。そういうふうするうちに編集することが好きになりました。だから、全障研で雑誌をつくることになったとき、これは自分のできる分野だなと思いい、名乗りをあげました。

自力で広げた販路

読める雑誌、お金を出して買う雑誌を月刊でつくるのは大変でした。当時、日本子どもを守る会の『子どものしあわせ』を、お母さんたちにすすめて教員が学校で配っていたので、参考にしました。大変読みやすく、中心になる先生やお母さんが配布、集金することが多いという話でした。障害児関係の雑誌もそんなふうにできればと話し合っではじめました。

雑誌づくりには慣れていないものばかりでしたが、編集、出版、販売も自分たちでやりました。これは後に『みんなのねがい』の強みになりましたね。みんなで苦勞しながらやったものの、創刊号の表紙の版画「まめまき」の字がうらがえしになっている、なんてこともありました。

つくった以上売らなければならぬ。この点でもいろんな団体や雑誌の財政担当の方にも話を聞きました。売るためには宣伝をしなければいけないので、新聞の広告部に行つて掲載のお願いもしました。新聞や雑誌に広告が出ているということはその雑誌が元氣だという証拠。

あとは本屋。頼むには日販などの取次店に行かなければならぬ。学校の仕事が終わってから急いで行かないとまにあわない。大

変でした。できたばかりの雑誌なので、はじめは相手にもされなかった。書店に本を置いてほしいと直接頼み込んだこともあります。

『みんなのねがい』で学び、
全障研を広げる

雑誌づくりとあわせて、全障研サークルをつくることを一所懸命考えていました。全障研のサークルを、例えば各学校につくる。そのなかで会計担当を決めてまとめ役になってもらう。「まとめ読者」という発想はその時もあったのです。そこで10、20、30部とかを扱ってもらい、少し割引きして、その還元金でサークル活動ができればいいなと思っていました。最初は、サークルとまとめ読者とはイコールだったんです。

その頃は研究サークルと言っても、当時の障害児学校では全障研ぐらいしかなかったもので、全障研のサークルを各学校につくるのが大事だと思っていました。それで、サークル、まとめ読者をつくるために全国を歩きました。友だちができるとその学校にも行ったし、出張で地方に行く機会があれば、一泊余分にとつて、その学校の先生と会ったり、夜、宿舎で話をしたり。いつも100冊くらい持って、それを一冊一冊売るよ

りも、10冊20冊と相手のところに置いておく。『みんなのねがい』は障害者の権利や発達について語りかけていく大きな武器になりました。

「自分たちの雑誌」という誇り

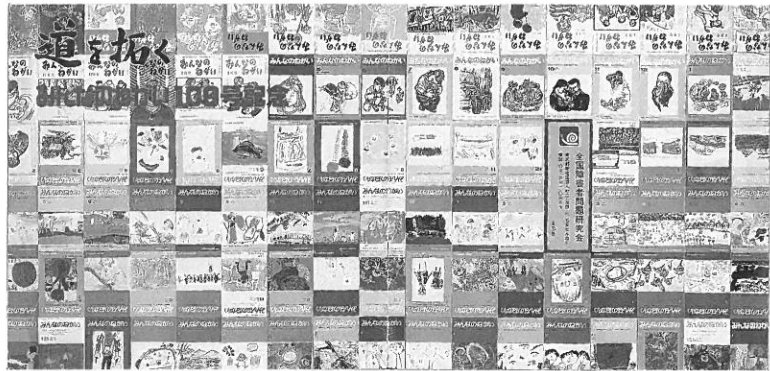
『みんなのねがい』をつくるとき、出版社から声もかかりましたが、それでは売れば出版社だけが儲かり、私たちの活動のプラスにならない。全障研の運営費はほ

とんど購読料収入から出ているので、みんながたくさん拡大する、がんばらなければつづけるという気持ちでやっていました。『みんなのねがい』を増やすことや活動が元氣になることが大事です。

『みんなのねがい』ができた頃、思うように部数が伸びなかった。そこで、売る専門の係を置くというところで、こういう会にはめずらしく「販売係」を作りました。藤井克徳さん（現きょうざれん専務理事）と二人で、販売計画を立てました。スローガンは「日本のすみずみまで『みんなのねがい』を」ということで、拡げていきました。

上：みんなのねがい100号記念
「道を拓く」

左：『みんなのねがい』創刊号



びに、みんなで手分けして持つて行つて、会場の隅に置きましたね。研究会が開かれると聞いたから、必ず行くようにしていました。田中・清水元委員長もいつも『みんなのねがい』を持ち歩いていました。

学校の仕事が終わった後にみんなで集まってね、学校の名前を挙げて、『みんなのねがい』を読んでいる学校があると、そこに電話して、見本誌を送らせてもらったり。そういう拡大の努力がなければ拡がっていかかったと思います。

小さなねがいを誌面に

『みんなのねがい』の中身については、普段はペンを握ったことがないお母さんたちに書いてもらいたいと思っていました。障害をもつて生きている、生きてきたということは苦しいけれど、その方の人生観の現れであり、一つの文化です。それに学ぶということが大切だと思っています。お母さんたちに書いてもらうこと、学校やサークルで勉強会ができるということを大切にしました。勉強したいやつは読め、という上から目線はいやだなと思っていましたね。お互いに学びあったり語りあったりできるようにしたいなとい

1 日本戦没学生記念会（わだつみ会）は、戦争に参加した学生の遺稿集、『きけわだつみのこえ（1949年）』出版を契機に結成された会。1950年に「学生が学問を捨てて再び戦争に参加することのないように」という決意で結成された。全国の大学、高校に広がった。特に孝行では燎原の火のようにはびろがり、全国に3000余りの支部ができていた。『きけわだつみのこえ』はその機関紙、当時は週刊で発行。